

【木守】 きまもり

木守とは庭の番人、庭師のことですが、この他、収穫せずに樹にひとつ残しておく果実もそういいいます。前者は「こもり」、後者は「きまもり」「きまぶり」と読むことが多いようです。

収穫せずに果実を一つ残す習慣は、残した果実には幸魂(さきだま=幸福をもたらす霊)が宿り、再生を約束すると信じる民間信仰に基づいています。特に柿、柚子に行われているようです。柿、柚子ともに秋の季語ですが、木守は収穫後ですので冬の季語となります。

柿紅葉が落ち始めると、樹下にいても枯れ枝の間から青空が広がり、熟しきった木守の色を惹き立ててくれます。この鮮やかでどこか寂しい色の響き合いは絵心、歌心をくすぐります。

・今年が来年になる空の木守の柿 井泉水

長次郎七種茶碗の内に「木守」という赤楽茶碗があるのはご存知のとおりです。長次郎七種茶碗とは「大黒」「東陽坊」「鉢開」(以上黒楽 以下赤楽)「早船」「臨齋」「検校」そして「木守」の七碗をいいます。長次郎七種茶碗という名称は江戸の中期からと思われませんが、この七碗がひと括りになった確かな理由はわかりません。うち三碗は行方不明となり現存を確認できません。(鉢開 臨齋 検校)

平成十年に公開された『江岑宗左茶書』所収の『江岑咄之覚』には「早船」は駿河という人物の作、「臨齋」は有楽焼と記されています。「早船」は作行きからも「大黒」「東陽坊」と同一作者とは私には思えません。

「木守」は『利休百会記』に極めて多く登場する茶碗です。確か30回を超えていたと思います。史料の信憑性に問題はありますが、江戸も前期から長次郎の代表作のひとつとされていたことは確かなようです。

「木守」の銘の由来は、利休は門人に長次郎焼を分けましたが、この一碗だけは最後まで手放さなかったとも、「検校」と同様に門人に選ばせ残ったひとつとも、茶碗の姿が柿に似ているからともいわれています。

『江岑咄之覚』によれば「木守」を始め「早船」「臨齋」「検校」は利休が付けた銘ということです。この覚書の記載をそのまま全て史実とすることは難しいかもしれませんが、江岑宗左(1613-1672)の時代、既に楽家以外で楽焼風の茶碗が造られ、しかも利休の銘と思われていたことは興味深いことです。

「木守」は関東大震災の際、東京の松平邸で割れてしまい、数片の欠けらのみとなってしまいました。これを楽家(惺入)が入念などの木守の写しを手本に、欠けらを集め復元しています。これが今日の「木守」の姿です。長次郎作の「一文字」「無一物」「太郎坊」に近い姿をしています。後補の部分がほとんどですが、その中に一片の欠けらをみごとにはめ込み焼成した技には感心させられます。

この茶碗は利休から少庵、宗旦そして官休庵に伝わり、真伯宗守より高松の松平家に献上されたそうです。

武者小路千家では家元襲名披露などの重要な茶会には、松平家より借りて茶会を催すと聞いています。

これがご縁なのでしょうか、高松には木守という銘菓があります。餅米等で作った最中皮の間に和三盆を含んだ柿餡を挟んだものです。

私は柿をかたどった主菓子は秋には複数を鉢に盛り、12月に入ると一器一個を原則に縁高か銘々皿でお出ししています。勿論、木守をイメージしてのことです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~